

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32413

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00425

研究課題名（和文）モダニズムと自伝（的）文学 スタイン、ヘミングウェイ、フィッツジェラルド

研究課題名（英文）Modernism and Autobiography: Stein, Hemingway and Fitzgerald

研究代表者

フェアバンクス 香織（Fairbanks, Kaori）

学校法人文京学院 文京学院大学・外国語学部・教授

研究者番号：70409613

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アメリカのモダニズム作家が執筆した自伝および自伝的作品の草稿調査を行い、それぞれの出版本と比較することによって、草稿が遺族ら第三者による編纂を通じてどのように書き換えられ、作品における「私」が脱構築/再構築されたかを明らかにすると共に、モダニズム文学における自伝の特徴を新たに見いだすことを目的としている。

コロナ禍のため、アメリカでの草稿調査が叶わない時期が続いた。その間は代替テーマとして「スペインかぜとモダニズム作家」を掲げ、2本の共著論文の執筆を行った。最終年度にようやく当初予定していた草稿調査が完了、その解析結果をもとに比較考察を行い、成果論文にまとめているところである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の成果における学術的意義は主に以下の2点である。1つ目は、アメリカのモダニズム作家における自伝（的作品）の独自性が、特に「私」の捉え方・描き方において顕著に見られることを指摘した点である。そして2つ目は、20世紀初頭に同時に発生した第一次世界大戦と1918年インフルエンザ（スペインかぜ）に関して、ヘミングウェイやスタインらが後者のパンデミックを完全に無視し、各々の自伝（的作品）にまったく言及しなかった理由に迫ったことである。多くの命を奪ったという点で戦争とパンデミックは同一線上に並ぶも、最新兵器を初めて駆使した大戦にはパンデミックにはない「革新性」が認められるというのが理由であった。

研究成果の概要（英文）： This research aims to clarify how "I" in a published novel was re-written and changed by editors after the author's death through detailed comparisons between the published text with its original manuscript. Even though I was forced to postpone my manuscript research in the States owing to COVID-19 pandemic, I finally conducted the manuscript research in 2022 of Ernest Hemingway, Gertrude Stein, and F. Scott Fitzgerald in multiple institutions such as JFK library, Harvard University, or Princeton University.

During the COVID-19, I shifted my research focus into "The 1918 influenza pandemic (Spanish flu) and Modernist writers" and wrote two academic papers. Both are included in a collection of papers titled as New Directions of Hemingway Studies in Japan and The Body of Modern: Machines, Art, and Media, published both in 2022.

研究分野：人文学

キーワード：アメリカ文学 モダニズム マニユスクリプト研究 自伝研究 アーネスト・ヘミングウェイ ガートルード・スタイン F. スコット・フィッツジェラルド

機関番号：32413
研究種目：基盤研究 (C)
研究期間：2018年度～2022年度
課題番号：18K00425
研究課題名 (和文) モダニズムと自伝 (的) 文学——スタイン、ヘミングウェイ、フィッツジェラルド
研究課題名 (英文) Modernism and Autobiography: Stein, Hemingway, and Fitzgerald
研究代表者 フェアバンクス香織 (FAIRBANKS KAORI)
文京学院大学 教授
研究者番号：70409613

研究成果の概要 (和文)

本研究は、アメリカのモダニズム作家が執筆した自伝および自伝的作品の草稿調査を行い、それぞれの出版本と比較することによって、草稿が遺族ら第三者による編纂を通じてどのように書き換えられ、作品における「私」が脱構築／再構築されたかを明らかにすると共に、モダニズム文学における自伝の特徴を新たに見出すことを目的としている。

コロナ禍のため、アメリカでの草稿調査が叶わない期間が長く続いた。その間は代替テーマとして「スペインかぜとモダニズム作家——モダニズム作家はなぜスペインかぜを「無視」したのか？」を掲げ、2本の共著論文の執筆を行った。最終年度によりやく当初予定していた草稿調査が完了、その解析結果をもとに比較考察を行い、成果論文にまとめているところである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の成果における学術的意義は主に以下の2点である。1つ目は、アメリカのモダニズム作家における自伝 (的作品) の独自性が、特に「私」の捉え方・描き方において顕著に見られることを指摘した点である。そして2つ目は、20世紀初頭に同時に発生した第一次世界大戦と1918年インフルエンザ (スペインかぜ) に関して、ヘミングウェイやスタインらが後者のパンデミックを完全に無視し、各々の自伝 (的作品) にまったく言及しなかった理由に迫ったことである。多くの命を奪ったという点で戦争とパンデミックは同一線上に並ぶも、最新兵器を初めて駆使した大戦にはパンデミックにはない「革新性」が感じられるというのが理由であった。

研究成果の概要 (英文)

This research aims to clarify how “I” in a published novel was re-written and changed by editors after the author’s death through detailed comparisons between the published text with its original manuscript. Even though I was forced to postpone my manuscript research in the States owing to COVID-19 pandemic, I finally conducted the manuscript research in 2022 of Ernest Hemingway, Gertrude Stein, and F. Scott Fitzgerald in multiple institutions such as JFK library, Harvard University, or Princeton University.

During the COVID-19, I shifted my research focus into “The 1918 influenza pandemic (Spanish flu) and Modernist writers” and wrote two academic papers. Both are included in a collection of papers titled as *New Directions of Hemingway Studies in Japan* and *The Body of Modern: Machines, Art, and Media*, published both in 2022.

研究分野：人文学

キーワード：アメリカ文学、モダニズム、マニユスクリプト研究、自伝研究、アーネスト・ヘミングウェイ、ガートルード・スタイン、F. スコット・フィッツジェラルド

1. 研究開始当初の背景

アメリカのモダニズム作家によって執筆された自伝 (的作品) は、ガートルード・スタインの『アリス・B・トクラスの自伝』(1933) を筆頭に、単なる事実の羅列には留まらない。執筆意図やその他の思惑によって想起する事柄が取捨選択され、作中で言及される出来事の時系列も排除される。また過去の出来事が記されているながら、執筆現在の作家のメッセージが隠蔽された形で盛り込まれることも少なくない。自伝におけるこれらの実験的手法は、モダニズム文学の特徴に通じているのはもちろん、自伝研究、モダニズム文学研究のいずれにおいても新たな特徴を

付加する可能性を秘めている。

ところが、モダニズム作家を中心とした自伝研究は、自伝で言及されている事柄と作家の実人生（伝記）を照らし合わせてその事実確認に終始するきらいがある。代表的な例としては、スタインとヘミングウェイが仲違いし、交流を断絶した経緯がそれぞれの自伝（的作品）で言及されながら、双方が異なった主張をしている点だろう。スタインの『トクラスの自伝』ではヘミングウェイに施した文学指南が功を奏さなかったこと、ヘミングウェイのパリ回想録『移動祝祭日』（1964）ではスタインがレズビアンのパートナー、アリス・B・トクラスに泣きすがる光景をヘミングウェイが目撃したことが絶交の契機になったと記されている。互いの主張の齟齬を指摘することが両作品の比較研究の軸となっているが、二人の主張を文字通りに捉えることはどこまで有効なのか。ヘミングウェイがスタインを非難していたのであれば、『移動祝祭日』を書くにあたってなぜ設定（1920年代パリ）や手法（自伝的主体の解体、時系列の排除）を『トクラスの自伝』のそれに倣ったのだろうか。

アメリカのモダニズム作家による自伝研究が遅々として進まない理由は主に三つあると考えられる。一つ目は、作品の多くが晩年に執筆されていることから「作品の質低下＝作家の心身の衰え」と安易に結論づけられ、それを超えた包括的な論考になかなか至らない点である。特に人生の後半から晩年にかけて心身の不調が目立ったヘミングウェイやフィッツジェラルドには、その傾向が顕著である。

二つ目は、自伝（的作品）の大半が遺族や出版社らの手によって編纂されていて「オリジナル原稿≠出版本」が明白でありながら、オリジナル原稿の入手が極めて困難な点である。編纂者によって消失・湾曲された作家の「声」に触れるべく、オリジナル原稿をもとにしたマニスクリプト研究に従事しようとしても、原稿が所蔵されている海外の研究所や図書館ではたいてい複写が許可されていない。結果的に「オリジナル原稿を用いた自伝研究」は、世界的に足踏み状態が続いている。

三つ目は、アメリカのモダニズム文学における自伝研究、特に「自己（self）」や「私（I）」に関する議論がまだまだ不十分な点であろう。「自分とは何か」という自己規定の問題だけでなく、エクリチュールを通じてどの自分をどう描くかという問題を、従来の自伝理論や文体論などを交えて多角的に論じる試みはほとんどなされていない。

このような学術的背景のもと、本研究では、アメリカのモダニズム作家の中でも特に自伝（的作品）を数多く残したスタイン、ヘミングウェイ、フィッツジェラルドを取り上げ、以下の学術的問いを立ててマニスクリプト研究および自伝研究に従事した。

- ① アメリカのモダニズム作家による自伝（的作品）において「自己」がどう規定され、それがエクリチュールを通じてどう描かれているか。
- ② 上記①で明らかになった作家の意図や手法などが、第三者による編纂によってどう損なわれてきたか。
- ③ アメリカのモダニズム自伝（Modernism Autobiography）の特徴を、モダニズム文学の中で再定位するとどのような位置づけが可能か。

2. 研究の目的

本研究の目的は二つ。アメリカのモダニズム作家が執筆した自伝および自伝的作品のオリジナル原稿調査を行い、各々の出版本と比較することによって、オリジナル原稿が遺族らによる編纂を通じてどのように書き換えられ、作品における「私」が脱構築／再構築されたかを明らかにすることと、モダニズム文学における自伝の特徴を新たに見いだすことであった。

3. 研究の方法

本研究は、自伝的アプローチの観点に立ち、オリジナル原稿をもとにしたスタイン、ヘミングウェイ、フィッツジェラルドの自伝（的作品）の分析をする課題に取り組むために、方法論的に3つの分析視点を掲げた。

- ① 一つ目は、各作品のオリジナル原稿の調査を行い、遺族や出版社によって削除された部分を特定、彼（女）らの編纂方法とその問題点を具体的に明らかにする点である。遺族などによって削除された文や場面は、自伝的事実が含まれていることが多いため、作家やペルソナとしてのイメージを損ねる危険性が高い。こうした削除場面をも視野に入れた考察を行うことによって、世に送り出されている編纂本が、オリジナル原稿とは筋や物語の展開、作品テーマまでもが異なる「別の作品」として位置付けられることを実証的に明らかにできる。
- ② 二つ目は、オリジナル原稿を自伝的アプローチの観点に立って読み解き、従来の先行研究にはない新たな解釈を提供する点である。自伝学の根底をなす「過去の想起」「記憶の取捨選択」「自己の再構築」をキーワードに原稿を読むことによって作品の理解にとどまらず、三作家における「実像と虚像のゆらぎの法則」が見えてくる。そこで、それぞれの作品にみられる「実像と虚像のゆらぎの法則」を特定したい。この考察を通じて、従来の作品研究に新たな視座を与えることが大いに期待される。

- ③ 3つ目は、②で明らかになった各作家における「実像と虚像のゆらぎの法則」を広くモダニズム文学および自伝文学の中で捉え直し、「モダニズム自伝 (Modernism Autobiography)」の特徴を明らかにする点である。研究代表者によるこれまでの研究によって、後年のヘミングウェイが長編／短編、フィクション／ノンフィクション問わず、一貫して自身を強く投影させた人物を複数登場させ、物語を展開していたことが分かっている。スタインならびにフィッツジェラルドの自伝 (的) 作品も同様の方法論で読み解き、三作家の特徴を比較検討することによってアメリカ人作家による「モダニズム自伝」の新たな様相を提示したい。

4. 研究成果

研究成果はアメリカで実施したマニユスクリプトの調査、およびその解析結果をもとに書き上げた論文と、コロナ禍により研究課題を一部変えて遂行した「スペインかぜとモダニズム作家——モダニズム作家はなぜスペインかぜを「無視」するのか？」に関する研究とその成果としての論文の二つに大分できる。前者のマニユスクリプト調査については、2023年3月まで調査を続けていたこともあって現在もなお解析・分析をしている最中であるが、ヘミングウェイとスタインの自伝的作品 (『移動祝祭日』および『アリス・B・トクラスの自伝』) をそれぞれ横断的に読み解くことによって、二つの作品が、師弟関係にあった二人のモダニズム作家をつなぐ時空を超えた交流の場であったことを明らかにした。

一方、後者の「スペインかぜとモダニズム作家——モダニズム作家はなぜスペインかぜを「無視」したのか？」については、答えを導き出すにあたり、まずフランス人詩人のギョーム・アポリネールとキュビズムの革新性を確認することから始めた。その後、第一次世界大戦における革新性を「新たな死 (New Death)」と戦争ポスターから捉えなおし、それがアポリネールおよびキュビズムのもつ革新性と軌を一にすることを示した。そして、それらの革新的側面がスペインかぜには欠如していたことを示すことによって、なぜスペインかぜが多くモダニスト作家に無視されたのか、忘れられた存在になり下がったのかについて一つの見解を提示した。また、スペインかぜとヘミングウェイの関連にも着目、論文「隠喩としての「吐き気」——一九一八年パンデミックと「兵士の故郷」再読」ではその試みの一つとして、短編「兵士の故郷」に焦点を当て、母親との断絶が描かれるこの物語にアグネスの影を読みとることができることを示す。そして、ほとんど議論されないまま今日に至っている「吐き気」に着目し、主人公ハロルド・クレブズが見舞われる吐き気の含意を1918年パンデミックとの関連性から迫った。

5. 主な発表論文等

<書籍>

1. 「隠喩としての「吐き気」——1918年パンデミックと「兵士の故郷」再読」『ヘミングウェイ批評 新世紀の羅針盤』(小鳥遊書房、2022年3月) 65-79. 共著
2. 「隠喩としての「吐き気」——1918年パンデミックと「兵士の故郷」再読」『ヘミングウェイ批評 新世紀の羅針盤』(小鳥遊書房、2022年3月) 65-79. 共著
3. 「追憶のパリ——死後出版作品群における「1920年代パリ」の記憶とその機能」『ヘミングウェイ批評 三〇年の航跡』(小鳥遊書房、2022年3月) 291-304. 共著
4. 「第一次世界大戦とパンデミックの分水嶺——革新性、アポリネール、「昔のパリ」」『モダンの身体 マシーン・アート・メディア』(小鳥遊書房、2022年10月) 195-218. 共著

<論文>

1. 「追憶のパリ——死後出版作品群における「1920年代パリ」の記憶とその機能」『ヘミングウェイ研究』第19号 (日本ヘミングウェイ協会、2018年6月) 41-51. 単著、査読あり
2. 「追憶のパリとマドリッド——時を超えて変容する「ヘミングウェイ」と所縁の地」『文京学院大学外国語学部紀要』(文京学院大学総合研究所、2020年2月) 第19号 81-92. 単著、査読なし
3. 「梶井基次郎「檸檬」における西洋モダニズムへの眼差し——憂鬱、セザンヌ、そして「私」の描き方」『文京学院大学外国語学部紀要』第19号 (文京学院大学総合研究所、2020年2月) 19-33. 単著、査読あり
4. 「1920年代のパリと「自伝」——スタインからヘミングウェイへと続くモダニズムの風景」『Transcommunication』7(1) (早稲田大学大学院国際コミュニケーション研究科、2020年3月) 1-11. 単著、査読あり

<学会発表>

1. 「自伝 (的) 文学とモダニズム——Hemingwayにおける「自伝」と「パリ」」(文京学院大学総合研究所共同発表会、2018年5月19日) 共同発表
2. “Hemingway’s Final Love Letter to Hadley: Reinterpreting the Original Manuscript

of *A Moveable Feast*' (The 18th Biennial Hemingway Society Conference in Paris. 2018年7月27日) 単独発表

3. 「1918年パンデミックは本当に「忘れられた」のか? ——Hemingway, “Soldier’s Home”における吐き気とモダニストによる記憶の操作」(日本アメリカ文学会 第60回全国大会、2021年10月2日、Zoom) 単独発表
4. “WWII Version of *In Our Time*: Unpublished Stories and Hemingway in the 1950s” (The 19th Biennial Hemingway Society Conference in Sheridan, Wyoming & Cooke City, Montana. 2022年7月20日) 単独発表

<その他 (招聘講師) >

1. 東京大学歴史家ワークショップ 一般向け連続講座「伝記の読み方を考える」第3回講師、2021年1月23日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

フェアバンクス香織 (FAIRBANKS KAORI)

文京学院大学 教授

研究者番号: 70409613

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 フェアバンクス香織	4. 巻 7(1)
2. 論文標題 1920年代のパリと「自伝」 スタインからヘミングウェイへと続くモダニズム的風景	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『Transcommunication』	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 フェアバンクス香織	4. 巻 第19号
2. 論文標題 追憶のバリとマドリード 時を超えて変容する「ヘミングウェイ」と所縁の地	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『文京学院大学外国語学部紀要』	6. 最初と最後の頁 81-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 フェアバンクス香織	4. 巻 第19号
2. 論文標題 追憶のバリ 死後出版作品群における「1920年代パリ」の記憶とその機能	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『ヘミングウェイ研究』	6. 最初と最後の頁 41-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Kaori Fairbanks
2. 発表標題 WWII Version of In Our Time: Unpublished Stories and Hemingway in the 1950s
3. 学会等名 The 19th Biennial Hemingway Society Conference in Wyoming & Montana (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 フェアバンクス香織
2. 発表標題 1918年パンデミックは本当に「忘れられた」のか？ Hemingway, “Soldier’s Home”における吐き気とモダニストによる記憶の操作
3. 学会等名 日本アメリカ文学会 第60回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kaori Fairbanks
2. 発表標題 Hemingway’s Final Love Letter to Hadley: Reinterpreting the Original Manuscript of A Moveable Feast
3. 学会等名 The 18th Biennial Hemingway Society Conference in Paris (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 フェアバンクス香織	4. 発行年 2022年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 364
3. 書名 モダンの身体 マシーン・アート・メディア	

1. 著者名 フェアバンクス香織	4. 発行年 2022年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 490
3. 書名 ヘミングウェイ批評：三〇年の航跡（共著）	

1. 著者名 フェアバンクス香織	4. 発行年 2022年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 ヘミングウェイ批評：新世紀の羅針盤（共著）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

東京大学歴史家ワークショップ 一般向け連続講座「伝記の読み方を考える」第3回講師、2021年1月23日

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------